

**就労継続支援B型、グループホームのスタッフ募集！**

特定非営利活動法人山脈では、下記の事業所のスタッフを募集しています。詳しい業務内容、待遇等については、採用担当までお問合せ下さい。電話0279-54-2947（笹澤まで）

【みやま工房（就労継続支援B型）】

募集 生活支援員／職業指導員 パート職員（6時間～7時間の勤務） 時給910円  
 事業 PC解体等のリサイクル事業・農業事業  
 業務 PCの解体作業、利用者の作業指導及び相談支援、記録等の事務など

【麦のゆめ（就労継続支援B型）】

募集 生活支援員／職業指導員 パート職員（6時間～7時間の勤務） 時給910円  
 事業 パンやお菓子の製造と販売、内職作業  
 業務 パンやお菓子の製造、配達、販売、利用者の作業指導及び相談支援、記録等の事務など

【ハーモニーやまなみ（共同生活援助）】

募集 世話人 パート職員（朝3時間、夕4時間、月15日程度の勤務） 時給960円  
 事業 障がい者向けグループホーム  
 業務 入居者の生活支援（食事作り、清掃、金銭管理、買物等）、相談支援、記録等の事務など

**新年度(令和4年)度賛助会員募集中！**

「山脈」の設立趣旨に賛同し、私達の活動を応援してくれる方を募集します。一口 2,000 円で何口でもかまいません。昨年に引き続き、皆様の温かいご理解とご支援を宜しくお願い致します。

賛助会員 年会費 2,000円(一口)

**山脈ニュースをお届けします**

賛助会員になられた方には、毎月、当法人の活動の内容をお伝えする「山脈ニュース」をお届けします。

**発行** 特定非営利活動法人 山脈 理事長 笹澤 繁男

住所：〒370-3604 群馬県北群馬郡吉岡町大字南下 983-2(みやま工房内)

電話：0279-54-2947 FAX：0279-54-9171

E-mail：[rep@npo-yamanami.jp](mailto:rep@npo-yamanami.jp)

URL：<http://www.npo-yamanami.jp/>

運営 就労継続支援B型事業所「みやま工房」  
 就労継続支援B型事業所「麦のゆめ」  
 就労継続支援B型事業所「キッチンハウスみやま」  
 グループホーム「ハーモニーやまなみ」1号・2号・3号・5号・6号

(文責：笹澤賢一)

【きょうされん群馬支部レポート】

きょうされん第45回全国大会 in 東北・いわて

「ここから つたえ つなぎ あしたを生きる」に参加してきました！

9月30日（金）、10月1日（土）の二日間、岩手県の陸前高田市で開催された「きょうされん第45回全国大会 in 東北・いわて」にきょうされん群馬支部の代表として参加してきましたのでご報告いたします。

今回の参加は、社会福祉法人桑の実福祉会の「くわのみ」から澁澤さん、NPO 法人ぼれぼれの「ゆーハウス前橋」から飯塚さん、そして、当法人の「みやま工房」から笹澤理事長、加邊さん、そして、私の5名です。

当日は、まだ真っ暗な早朝4時に「みやま工房」を出発し、車で高速道路を走り、栃木県、福島県、宮城県を通り抜け、6時間かけて岩手県陸前高田市に到着しました。天気は両日ともに穏やかな秋晴れで最高のイベント日和でした。

オープニングセレモニー

音楽でつづる東日本大震災からの復興ストーリー

それでも頑張る僕らの仲間

全国大会は、岩手県釜石市出身のシンガーソングライターのあんべ光俊さんときょうされんの仲間たちによる楽しい歌とダンスで幕を開けました。

あんべ光俊さんは、2011年には障がいのあるなしを超えて街角で一緒に演奏やダンス、大空を楽しむ音楽祭、とっておきの音楽祭を立ち上げ、全国30カ所以上に広がる音楽祭PR大使を務めています。

そして、一緒にステージで会場を盛り上げてくれたきょうされんの仲間たちは、「奥州・すてっぷダンサーズ」、「秋田・杉の木園パフォーマーズ」、「陸前高田・あすなるホームシンガーズ」、そして、きょうされんの全国の仲間の有志たちです。

オープニング曲は、震災時、小学生だった子供たちが家族や友人を失った痛みや、再生への希望を吐露した短歌で織りなすオリジナル曲です。歌詞となった短歌のひとつひとつが胸に染みます。

その後、ステージではダンシングチームの踊りが弾ける曲「オハイエ」、被災地の方々の今の想いが込められた曲であすなるホームの千葉昭郎さんの作った大会テーマソング「ビルドバックベター（より良き再建を）」、そして、感謝の気持ちを綴った一曲「ありがとう」と続きました。

最後は、「トビウオだって初めは飛べずにいたんだ…明日は飛べ飛べ」と歌う「トビウオ」という曲で、観客も立ち上がり一緒に踊り、会場がひとつになりました。あんべ光俊さんと仲間の皆さんたちから元気を頂き、とっても素敵なオープニングでした。





## 東日本大震災から11年特別企画 公開特別シンポジウム

### 「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」を地域・世界中のすみずみに！

1日目は午後より、東日本大震災から11年特別企画の公開特別シンポジウムに参加しました。シンポジウムのテーマは「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」です。今回の全国大会の会場となった陸前高田市は、東日本大震災で多くの人を亡くし、まちを失い、深い悲しみと絶望の中、多くの人に支えられながら復興を進めてきました。この全国大会の実行委員長を務める戸羽太市長が、震災によりまちの全てを失い、正にマイナスからの陸前高田市の復興に際し、その合言葉として掲げたのがこの「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」です。戸羽太市長は、市長就任後、わずか1か月でこの未曾有の震災を体験し、ご自身も奥様を震災で亡くされました。しかし、震災から1か月後、震災支援に陸前高田市に入ったきょうされんの藤井専務理事と戸羽太市長が対談された時の動画が会場で流されましたが、その中で戸羽太市長が復興に向け、既に「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」への想いが強く語られていたことにはとても驚きました。戸羽太市長のその強い意志にとっても感銘を受けました。

陸前高田市が掲げた「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」とは、障がいのある人もない人も、お年寄りも子供も、そして、性別等にも関係なくあらゆる人が同じように輝ける共生社会を目指した取り組みです。そして、日本においてその先駆けとして、誰もが「お互い様」と支えあうことが普通の社会になれば「ノーマライゼーション」という言葉がいらないというメッセージを陸前高田市は発信してきました。

きょうされんの40周年記念映画「星に語りて」でも、会議室で役場の職員さんに障がいのある方たちが震災からの復興にあたり、新しいまちづくりについて自分たちの想いを話す場面が描かれていました。これまで陸前高田市では「障がい者計画・障がい福祉計画」の策定委員会やワーキンググループの構成員の半数に障がい当事者の方が携わり、その思いを形にすることができたそうです。このシンポジウムでは、戸羽太市長が推進してきた共生社会を目指した陸前高田市の11年間のまちづくりの取り組みを学びました。

そして、このシンポジウムで一番驚ろかされたのは、シンポジストのひとりで2012年から2015年の三年間、「陸前高田市障がい者計画・障がい福祉計画」の策定の支援に担った浦和大学教授の河東田博さんの一言です。それは、スウェーデンでは既に1980年代にノーマライゼーションという言葉は使われなくなったというのです。

私達、福祉に携わる者は福祉を学ぶ中で「ノーマライゼーション」の理念は、スウェーデンなどの北欧諸国より世界に広まったと学びました。日本は、今日でも未だに「ノーマライゼーション」の理念すら社会に根付いたとは言えず、今でも福祉の理念を語る時に教科書でも何でも「ノーマライゼーション」という言葉が氾濫しています。

しかし、そのスウェーデンでは1980年代には「ノーマライゼーション」という言葉すら過去のものとなり、新たな理念を表す言葉に置き換わってきていると言うのです。それは、「インクルーシブ」という言葉で、最近、日本でも見聞きすることが増えてきました。これは、年齢、性別、国籍、障がいの有無に関係なく、あらゆる人が孤立したり、排除されたりしないよう擁護し、社会構成員として包み、支えあうという理念です。

理念、そして、それを意味する言葉は社会や時代の移り変わりとともに変化するもので、私達の頭の中も都度バージョンアップをしなければいけないと思いました。

戸羽太市長は、東日本大震災が起きる直前の2011年2月に初当選、そして、現在3期目を迎えています。いずれは戸羽太市長も退任される時が来るとは思いますが、その後も、この「ノーマライゼーションという言葉のいらないまちづくり」の理念が後世まで脈々と陸前高田市の文化として根付くことを期待します。



## 東日本大震災から11年 特別企画 特別分科

### 【前半】シンポジウム「あの時から学ぶ～命を守りつないでいくために」

2日目の午前は、シンポジウム「あの時から学ぶ～命を守りつないでいくために」に参加しました。最初に「あの時から学ぶ」ということで、震災を体験されたシンポジストの方々から、震災の発生時、そして、混乱の中、命を守りつないできた話をお聞きました。

2011年3月11日当時、避難できなかった人たちがいたこと。そして、その後、取り残された人たちの命を守るために必要だった「個人情報開示」について明らかになった問題。映画「星に語りて」でも描かれていた「個人情報開示」に関する教訓は、その後の熊本地震の時でも十分に生かされていなかったこと。「個人情報保護法」には個人情報の保護の観点と合わせ、災害時などの有事の際には住民を守るために使うことが明記されているにもかかわらず、実際の有事の際には、個人情報保護のみに重きが置かれ開示に行政が難色を示すことなど。

また、助かった命を繋ぐための避難を続けることが出来ずに亡くなった方がいたこと。そこで明らかになった避難所や福祉避難所の問題。そして、多くの方が避難途中や避難後に震災関連死として亡くなられたことなどがシンポジストの方々から報告されました。その後、壇上では、あの時の経験で学んだ命をあきらめることなく、その命を繋いでいくために、これから、私たちは何ができるかについてシンポジストの方々から様々な発言がありました。

特に私の心に残ったのは、福島の特定非営利活動法人さぼーとセンターピアの青田由幸さんの「今、福島は国に対し付度するよう無言の圧力をかけられている」というお話でした。復興支援を盾に汚染土や汚染水、福島の甲状腺がんの子供達と放射能の因果関係、未来の子供達への放射能の影響など原発災害の話はタブーとされているそうです。今なお、福島には「見えない災害、そして、消される災害」があり、そして、これからも存在し続けます。

### 【後半】トークセッション ～今あらためて「支える」とは～

2日目の午後は、トークセッションに参加しました。壇上には、震災後、全国から被災地に「支援」に入った方と被災地で「支援者」の受け入れを行った方がそれぞれ上がり、「支える」、そして、「支えられる」ということについて語り合いました。そこでは、「支援」に入った方々が現場で感じた「もっと何かできたのでは」という焦燥感や「何もできなかった」という無力感などが語られました。



また、一週間ごとに交代して被災地に入ってくる支援員から様々な提案をしてもらうことはありがたいのだけど、被災地からすると今はまだできないこともあり、そうした互いの想いが交錯するなかで、「地元のペースを忘れないで欲しい」ということに気づかされたそうです。そして、「支える」、「支えられる」という一方通行な想いではなく、お互いに「ささえあう」関係として相手の立場で考え、つながっていくことの大切さを感じたそうです。この気づきは、今後のきょうされんにおいても貴重な財産になると感じました。

### 【終わりに】

今回、陸前高田市への道中、東北自動車道を走り福島県、そして、三陸自動車道に入り宮城県、岩手県と走り抜けました。車窓から見える景色は稲刈りが始まった金色の田園風景やのどかな里山などの日本の原風景でした。今回、私は震災後、初めて被災地を訪れました。

車のハンドルを握りながらこの景色をみる限り、11年前に震災による津波や原発事故りよる甚大な被害を受けたとは思えませんでした。しかし、改めて被災された方や支援に入られた方から当時の様子や今もなお残るその課題を聞き、震災はまだ終わっていないと感じました。この経験を未来のために繋げて欲しいと思います。(笹澤)

